一般講演

1 名古屋市内ビル受水槽における節足動物の混入について 近藤繁生(愛知医大・寄生虫学)・○杉山章(名古屋女子大・公衆衛生学)・山田英夫(セントラル商事㈱) Arthropods contaminated in the storage tanks of the tap waters settled in the buildings of Nagoya City Kondo, S., Sugiyama, A. and Yamada, H.

昨年、名古屋市内のビルの飲料水受水槽の清掃に立会い、槽内の混入物を調査する機会を得た。調査した受水槽は、市内の商社雑居ビル、マンション2ヶ所、その他2ヶ所の計5ヶ所のビルの地上(1ヶ所地下)と屋上の受水槽で、方法は槽内(3 m³ ~ 23 m³)の水を全てプランクトンネットで濾過し、残渣を実体顕微鏡で調べた。その結果、どの受水槽にも、昆虫類をはじめ、ダニ類、クモ類、動物性プランクトン類など節足動物の混入が認められた。昆虫類ではユスリカ幼虫が最も多く、多い受水槽で15~16個体/1 m³を数えた。それ以外にアリ、トビムシ、アザミウマなど、また、ダニ類ではハマバエナタカラダニやコナダニ類などが、クモ類ではサラグモ科などの小型種が認められた。これらの混入ルートは、おもに受水槽の通気孔からと思われ、ダニ類の中には槽内での繁殖も考えられた。

3 家屋に侵入越冬するカメムシの富山県における近年の飛来状況 渡辺 護(富山衛研) Notes on the flight activity of stink bugs in recent years in Toyama prefecture Mamoru Watanabe

富山県では毎年秋に標高150~500mの山間地ではクサギカメムシ、標高600~1200mの山地ではスコットカメムシの多量飛来により、カメムシの放つ悪臭に悩まされている。そこで、演者は1995年から富山県の立山山麓に位置する「立山山麓家族旅行村」、「立山風土記の丘」などにおいて、両種の飛来生態を観察してきた。

調査方法は建物の壁面に飛来しているカメムシを、飛来が始まる9月下旬から飛来がみられなくなる12月上旬まで、ほぼ毎週壁の方位別に、スコットカメムシは15時前後に、クサギカメムシは14時前後に全数を数えることで行った。さらに、スコットカメムシは隙間トラップを用い、潜み数の推移を観察した。

その結果、「立山山麓家族旅行村」におけるスコットカメムシの飛来数は、年々減少する傾向がみられ、とくに1998年のそれは顕著であった。一方、「立山風土記の丘」などにおけるクサギカメムシの飛来は、1997年が最も多く、次いで1996年、1998年の順であった。また、スコットカメムシは建物の西に面した壁面に多く飛来する傾向がみられたが、クサギカメムシは建物の建っている位置により異なっている傾向がみられた。

2 名古屋地方の室内塵ダニ相の変化と都市化および住環境との関連—住環境乾燥化説— 須藤千春(名大・医・医動物) Relationship between the house dust mite fauna, and urban and indoor climates in Nagoya, a dehydration hypothesis. Chiharu SUTO.

近年におけるアレルギー疾患増加の一因として、室内環境の温暖湿潤化に伴うヒョウヒダニ類の増加が指摘されている(住環境湿潤化説)。しかし我々の調査では、近年湿度要求性の高いヤケヒョウヒダニ優占家庭が減少し、室内環境の乾燥化が示唆された。そこで名古屋地方における外気の温湿度変動および立地条件、構法の異なる住戸における室内外の温湿度とダニ相との関連を検討した。《結果》1891年から1996年の約100年間に年平均気温は約14℃から16℃に上昇し、相対湿度は約77%から67%に約10%低下していることが示された。特に1960年代以後、気管支喘息の好発月の9~11月およびスギ花粉症の好発月の3~4月の湿度低下が顕著であった。郊外の在来型木造住宅では年平均室内湿度が約65%で、ヤケヒョウヒダニが優占し、市街地の冷暖房のある気密型住宅では年平均相対湿度が約50%で、コナヒョウヒダニが優占していた。《結語》以上から、都市化に伴う温暖乾燥化および住宅の気密・断熱化、冷暖房の普及等による室温の上昇、相対湿度の低下がダニ相変化の一因であり、疾患の発症悪化との関連性も示唆されたので、住環境乾燥化説を提唱する。

4 ネットアイシマカ、ヒトスジシマカ幼虫の低温適応性について 上村 清・高橋華子・小向 潤(富山医薬大・医・感染予防医学) Tolerance of *Aedes aegypti* and *Ae. albopictus* to low temperatures. Kamimura, K., Takahashi, H. and Komukai, J.

25℃14時間照明で累代飼育中のパキスタン産ネットアイシマカ、タイ産、八重山産、富山産のヒトスジシマカの幼虫の低温適応性を実験した。

産卵させたろ紙を25℃で1~2昼夜乾かし、水を加えて、15、20、25、30℃、14時間照明の恒温器に入れ、孵化幼虫各30匹を管瓶でエビオスを餌に個別飼育し、23日間、毎日の成長を記帳した。

いずれも温度が高くなると、成長が早まり、30℃と25℃では差が明らかでなかったが、20℃では八重山産のヒトスジシマカは成長が速く、タイ産のは富山産のよりも遅かった。幼生期間は、タイ産が長く、八重山産と有意の差があり、富山産とパキスタン産ネットアイシマカは中間的な数値を示した。

15℃では累代飼育歴7代の八重山産のヒトスジシマカは孵化しなかったが、123代に及ぶタイ産と74代の富山産のヒトスジシマカはすべて孵化発育した。パキスタン産ネットアイシマカは孵化数は16匹と少なかったが、孵化幼虫の88%が23日間生存し、2匹が蛹にまでなり、ヒトスジシマカよりもむしろ生存率や成長が良かった。